

「被服構成学実習」授業カリキュラムの構築と実践

－基礎縫いを中心に－

The development and practice of a class curriculum for “Clothing Construction Practice” :

A focus on articles on fundamental sewing

末弘 由佳理, 山本 泉, 中尾 時枝

SUEHIRO Yukari, YAMAMOTO Izumi, NAKAO Tokie

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

「被服構成学実習」授業カリキュラムの構築と実践
—基礎縫いを中心に—

The development and practice of a class curriculum for “Clothing Construction Practice” :
A focus on articles on fundamental sewing

末弘由佳理* 山本 泉* 中尾時枝*

SUEHIRO, Yukari* YAMAMOTO, Izumi* NAKAO, Tokie*

キーワード : 授業カリキュラム 基礎縫い 新学習指導要領 デジタル教材 被服構成学

1. はじめに

武庫川女子大学短期大学部生活造形学科アパレルコースでは、被服構成学実習を1年生に設置しており、1年生前期に「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」、1年生後期に「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」の科目名で開講している。本稿では、「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」の授業カリキュラム及び授業実践、特に基礎縫いを中心に報告する。

2. 「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で扱う作品

「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」と「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」の2科目は、被服構成学実習の基礎的な知識・技術を身につけることを目的とした科目である。これらの科目はいずれも半期開講科目である。縫製に関する基礎技術を網羅できるよう数アイテムの衣服を教材として取り扱うことになるが、本学では、ブラウス、スカート、ワンピース、パンツの4点を作品として扱ってきた。平成21年度以前は、ブラウスと裏付セミタイトスカートを前期（「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」）に、後期（「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」）に、ノースリーブワンピースとパンツとしていた。

平成15年度施行の学習指導要領より高等学校において2単位科目の「家庭基礎」^①が新設され、高等学校の3年間に被服製作を全く行わず、大学に入学する生徒も存在するという現象が起きることとなった。平成21~22年に実施した調査^②によると、全国1331の教育課程において、50.6%が「家庭基礎」を選択しており、全国の半数以上が被服構成学実習を高等学校で習得せずに、大学に進学していることが分かる。このような現状の下、本学においても教材を再検討する必要性を感じた。

平成22年度より現在に至るまで、裏付セミタイトスカートとノースリーブワンピースを前期「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」の教材とし、後期（「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」）には、ブラウス、パンツというように、年間を通して、2科目間でアイテムの順序を変更し、製図、縫製共に複雑な曲線を多く有し、また衿付けや袖つけといった比較的難しい技術を要するアイテムを後期に移動した。本科目（「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」）において、扱う作品に含まれる作図、縫製に関する技術を表1にまとめた。作図においては、原型の作図、ダーツ移動を含む基礎的な展開を学び、縫製においては、最も基礎的な知識・技術を身につける内容である。1年生の後期科目である「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」を継続して受講することで立体構成における基礎知識・技術

* 生活環境学科准教授

の大半を習得することができ、学生にはその旨を履修指導している。図1は (1) スカート、(2) ワンピースの作図である。衣服に限らず、製図というものに対して、初めて向き合う学生が大半な中、バストやウエストの寸法から各部の寸法を算出して作図する割り出し製図方式^③は分数や細かい計算を伴うことも含め、体験不足故の困難さが見受けられた。そこで、被服構成学実習への苦手意識を抱かないための一策として、製図に関するデジタル教材^{④⑤}を作成し、平成23年度から受講生が使用している。また、スカート、ワンピースの2作品には併せてレポートを課しており、内容は、デザイン画、用布の詳細（布名、単価、購入寸法、購入価格、購入店、5×5cm大の布の貼付）、採寸箇所及び寸法、縮尺製図、仮縫い補正箇所、縫製手順、反省及び感想（布購入時から着想観察、手持ちの衣服との比較など）を記載することとしている。

表1 作品に含まれる作図・縫製の技術

	スカート	ワンピース
作図	スカート原型 セミタイトスカートへの展開	身頃原型 ダーツ移動 ワンピースへの展開 見返し(ダーツの消し方含む)
縫製	仮縫い ダーツ縫い ファスナーつけ(普通ファスナー) 伸び止めテープの扱い 奥まつりによる裾の始末 裏布の縫製 三つ折りによる裾の始末 中とし ベルト芯を用いたベルト付け ファスナーまわりの裏布の始末 ホックつけ 糸ループ	仮縫い 接着芯の扱い 見返しつけ 伸び止めテープの扱い ファスナーつけ(コンシールファスナー) ファスナーテープの端ミシン 斜めまつりによる裾の始末 見返しの始末

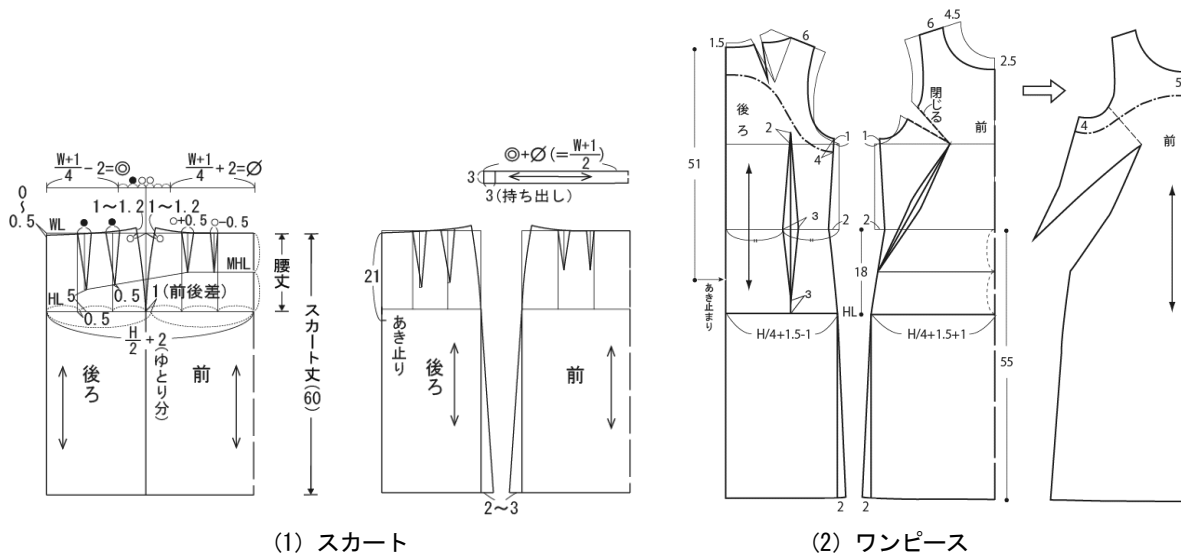


図1 「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で扱う作図

3. 「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」作品に含まれる技術

本科目は、学科の専門科目であると同時に、教職課程の中二種免（家庭）教科に関する科目である。中学校においては、被服製作の作品として扱う作品を表2.3に示す。表2には平成10年に公示された学習指導要領^①（以下、旧学習指導要領とする）に基づいたカリキュラムに対応した教科書に記載された作品例であり、表3は平成20年に公示された学習指導要領^①（以下、現行学習指導要領とする）に基づいたカリキュラムに対応した教科書に記載された作品例である。

旧学習指導要領^①下（表2）において扱われているハーフパンツ及びショートパンツに使用される縫い方は、縫い代の始末（教科書^{⑥⑦}のイラストはロックミシンで始末されているが、始末方法の記載は無）、布を中表に合わせての直線・曲線縫い及び端ミシンである。T型シャツ、プルオーバーシャツにおいても上記のパンツ2点と同様の縫い方を用いている。縫い方の観点ではないが、T型シャツは、衿ぐりを見返しにより始末している。以上の4点は、いずれもパターン作図は記されておらず、市販のパターン或いは出来上がり線や裁断線が印刷された市販の教材^⑧を使用するものと思われる。ちゃん

表2 中学校(旧学習指導要領⁽¹⁾)で扱う作品⁽⁶⁾⁽⁷⁾

出版社	教科書名	被服製作の作品例
開隆堂	技術・家庭 家庭分野	ハーフパンツ T型シャツ ちゃんちゃんこ
東京書籍	新しい技術・家庭 家庭分野	ショートパンツ プルオーバーシャツ はんでん

表3 中学校(現行学習指導要領⁽¹⁾)で扱う作品⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾

出版社	教科書名	小物製作の作品例	被服製作の作品例
開隆堂	技術・家庭[家庭分野]	ペットボトルホルダー ファイルカバー ショルダーバッグ ウォールポケット パッチワークタペストリー	ハーフパンツ ベスト
東京書籍	新しい技術・家庭 家庭分野	ファイルカバー トートバッグ マイチェアカバー 防災リュック	ハーフパンツ
教育図書	技術・家庭 家庭分野	アームカバー きんちやく袋 ショルダーバッグ	エプロン

ちゃんこ、はんでんは平面構成の衣服として紹介されているが、使用される縫い方は上記にまつり縫いが加わっている。両書籍⁽⁶⁾⁽⁷⁾ともに、和服においては、作図の方法の記載がある。また、東京書籍の教科書⁽⁷⁾には、浴衣の着方が男女別にイラスト付で解説されている。

「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」では、教材として和服(平面構成)は扱っていないが、縫製技術としては表1に示す内容であり、中学校において扱う作品に必要な技術は全て網羅している。作図においても、本科目において、身頃・スカート原型及び図1の作図を教材としているので、ちゃんちゃんこやはんでんの作図は指導できると言えるが、和服の作図の理解を促す意味で囲み製図⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾について触れておくとも理解が増すのかもしれない。平成21年度以前は、本科目でスカートとブラウスを扱っており、これらには(別裁ちの)見返しが含まれていなかった。開隆堂の教科書⁽⁶⁾のT型シャツには、(別裁ちの)見返しが扱われていることから、教職課程の中二種免(家庭)教科に関する科目である本科目において、(別裁ちの)見返しについて学ぶことは重要であり、この観点から本科目に見返し付のワンピースを扱うことは適していると判断できる。

また、現行学習指導要領⁽¹⁾下(表3)において扱われているハーフパンツ及びベストに使用される縫い方は、縫い代の始末は開隆堂の教科書⁽¹¹⁾ではロックミシンと明記されており、東京書籍の教科書⁽¹²⁾ではイラストからはロックミシンと読み取ることができるが、文字としての記載はない。縫い代の始末後は、前述した旧学習指導要領⁽¹⁾下のハーフパンツ及びショートパンツと同様である。小物作品の多くは、「まつり縫い」や「スナップつけ」、「ボタンつけ」を一部入れており、手縫いとミシン縫いを併用している。小物は、開隆堂の教科書⁽¹¹⁾に掲載されるショルダーバッグを除く全ての作品のミシン縫いは曲線縫いを含まず直線縫いのみとなっている。被服においては、ハーフパンツとベストは曲線縫いを含んでいるが、エプロンは直線縫いのみである。以上のことから、教育図書の教科書⁽¹³⁾に掲載される作品例はいずれにも曲線縫いを含んでいないことが分かり、直線縫いのみで仕上げることのできる作品を重要視して選定したと予測することができるが、エプロンを立体的に仕上げる方法として別ページに、ダーツ、タック、プリーツ、ギャザーの説明がイラスト付で丁寧に説明されている。3社⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾共に被服の作品例にはいずれもパターン作図は記されておらず、前記と同様に市販のパターン或いは出来上がり線や裁断線が印刷された市販の教材⁽⁸⁾を使用すると思われる。

旧学習指導要領⁽¹⁾下(表2)と現行学習指導要領⁽¹⁾下(表3)で扱う作品を比較すると、現行学習指導要領⁽¹⁾下の教科書では、小物の製作が掲載されている。また、被服製作の作品例の数が減少し、和服の記載が皆無になった。さらに、教育図書の教科書⁽¹³⁾に小学校の復習として、「糸通し」、「玉結び(指を使う方法)」、「玉どめ」、「ボタンつけ」が掲載され、開隆堂の教科書⁽¹¹⁾には小学校の振り返りとして、「玉結び(指を使う方法)」、「玉どめ」、「並縫い」、「本返し縫い」、「半返し縫い」、「ボタンつけ」が掲載され、東京書籍の教科書⁽¹²⁾には「玉結び(指を使う方法)」、「玉どめ」、「ボタンつけ」が掲載されている。旧学習指導要領⁽¹⁾下の教科書では、東京書籍の教科書⁽⁷⁾に小学校の学習の振り返りとして「ボタンつけ」の掲載があるが、現行学習指導要領⁽¹⁾下の教科書で振り返り部分が強化されている。

作品例として現行学習指導要領⁽¹⁾下の教科書には和服の掲載はないが、教育図書の教科書⁽¹³⁾には参考として布製品のつくり（構成）が解説されており、ジャケット、パンツ、スカート、ゆかた、手さげ袋、帽子のハンガーイラスト及びパーツを平面に分解した状態のイラストが掲載されている。浴衣の着方については、教育図書の教科書⁽¹³⁾には、男女別にイラスト付で解説されている。

4. 基礎縫い

4-1 基礎縫いの必要性

「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で扱う作品のアイテムは、前述した通り、スカートとワンピースである。これらを製作するに当たり、数種の縫い方を用いて縫製することになり、それらの基礎的な縫い方の多くは、小・中・高等学校において既習の内容のものが大半である。小学校の教科書⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾には、「玉結び（2種）」、「玉どめ」、「並縫い」、「本返し縫い」、「半返し縫い」、「かがり縫い」、「ボタンつけ」、「端ミシン」が掲載されている。

中学校においては、開隆堂の教科書⁽⁶⁾⁽¹¹⁾には、「まつり縫い」、「スナップつけ」、「かぎホックつけ」、「千鳥掛け」、「ロックミシン」、東京書籍の教科書⁽⁷⁾⁽¹²⁾には、「まつり縫い」、「スナップつけ」、「伏せ縫い」と「袋縫い」、「ロックミシン」、教育図書の教科書⁽¹³⁾に「スナップつけ」、「まつり縫い」、「千鳥掛け」、「ロックミシン」が掲載されている。高等学校の教科書である「ファッション造形基礎」⁽¹⁴⁾の内容を加えると、一般的な基礎縫いの全てを小・中・高等学校において学習していることになり、大学入学前の既習内容ということになる。しかしながら、いずれの校種においても学校間格差は否めない。比較的規模の小さい中学校は、一つの小学校からの進学というケースもあり、この場合と小中一貫校において学校間格差は生じない。小学校の数と中学校の数から判断すると多くの場合には、一般に複数の小学校から一つの中学校に進学するため、小学校での既習内容に学校間格差が生じることになる。高等学校においては、平成15年度より新設された「家庭基礎」には被服製作実習が含まれず⁽¹⁾、これは被服製作の知識・技術において大きな格差を生み出すと言える。

図2は、平成28.29年度の「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」受講学生計46名を対象に、基礎縫いに関する入学時の知識について調査した結果である。各縫い方の上段のバーは「入学前からできた」、「今回出来るようになった」の大別であり、下段のバーはそれらの内訳（「入学前からできた」：「小学校で習った」「中学校で習った」「高等学校で習った」「家族から習った」「独学」、「今回出来るようになった」：「初めて聞いた」「名前だけ知っていた」）の割合をプロットしている。なお、「玉結びA」は、針を用いる方法、「玉結びB」は指を用いての方法である。

「入学前からできた」が全体の50%を超す縫い方は「並縫い」、「ぐし縫い」、「本返し縫い」、「半返し縫い」、「端ミシン」、「玉結び（2種）」、「玉どめ」である。「ぐし縫い」を除く縫い方はいずれも小学校で学ぶ内容であり、大半の学生が入学前からできたことは学習指導要領上、当然のことではあるが、内訳としては「小学校で習った」が最も割合が高いとは言え、100%ではない。「中学校で習った」、「高校で習った」との回答も一部にみられることから、学校間格差や個人差の観点から既習の内容であっても繰り返し学ぶことでの定着化が期待できると考えることができる。

中学校の教科書⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾から判断した中学校で既習の縫い方である「流しまつり」、「ロックミシン」の「入学前からできた」の割合はいずれも37.0%である。「入学前からできた」の内訳であるが、「流しまつり」は、「小学校で習った」6.5%、「中学校で習った」6.5%、「高校で習った」4.3%、「家族から習った」15.2%、「独学」4.3%である。「まつり縫い」は、「初めて聞いた」の割合が全体の50.0%、「今回出来るようになった」の中においては、79.3%が「初めて聞いた」と回答している。本学では

「奥まつり」との区別のため「流しまつり」という名前で調査したが、「流しまつり」と「まつり縫い」を別物と認識し、このような結果になったのかもしれない。「ロックミシン」は、「小学校で習った」2.2%、「中学校で習った」6.5%、「高校で習った」10.9%、「家族から習った」15.2%、「独学」2.2%であった。「ロックミシン」は、中学校の教科書⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾に掲載があるとは言え、設備面や安全面から実際には使用していない中学校が多いのかもしれない。

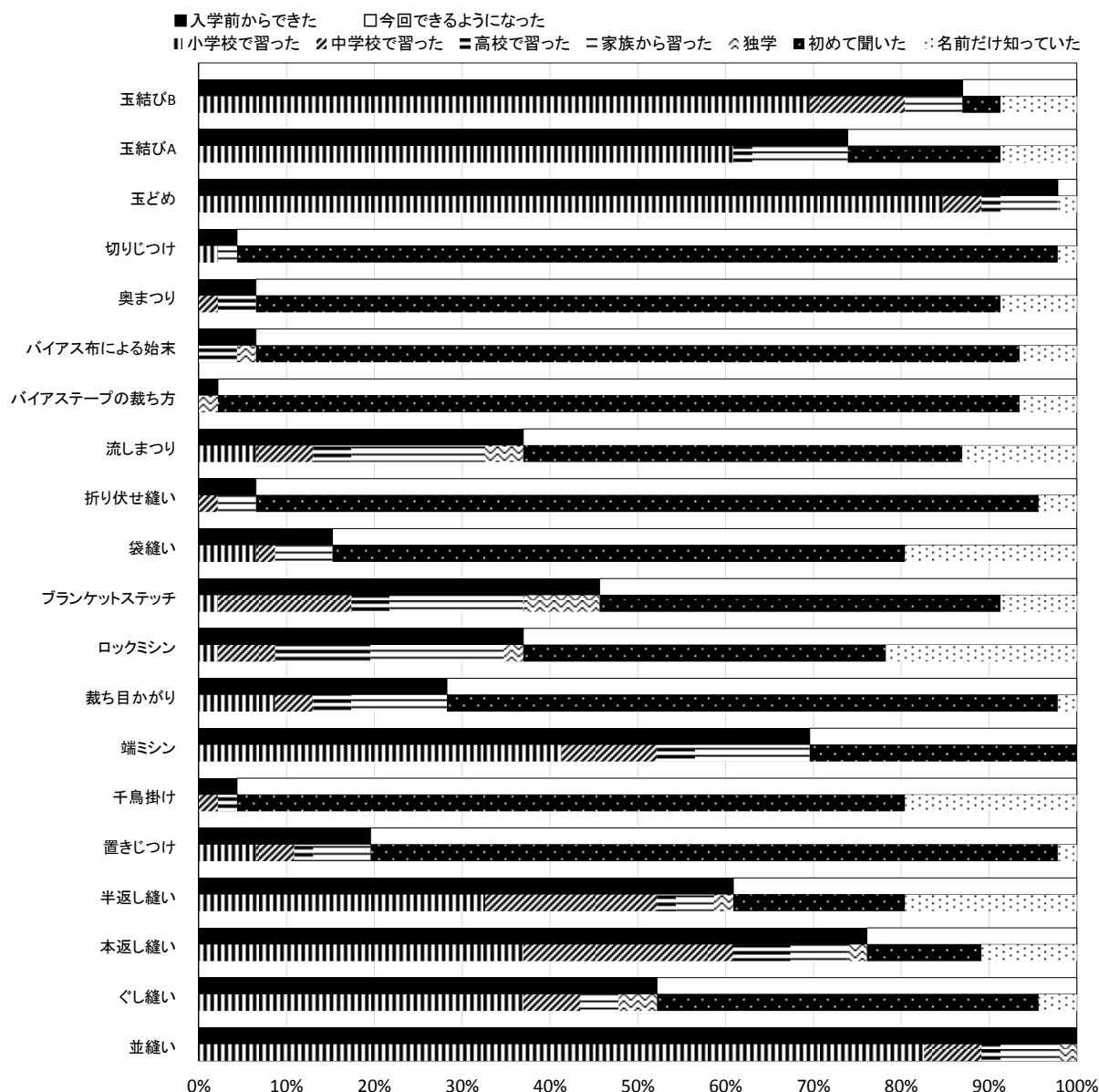


図2 基礎縫いに関する大学入学時の知識

「千鳥掛け」は、開隆堂の教科書⁽⁶⁾⁽¹¹⁾と教育図書の教科書⁽¹³⁾の2社に掲載があるが、「入学前からできた」割合は全体の僅か4.3%である。教科書会社3社の内2社が掲載している縫い方としては、この値は低いと言える。「今回出来るようになった」の中の「初めて聞いた」の割合は79.5%、「名前だけ知っていた」は20.5%であり、これは、中学校において実際には縫わなかったが教科書を用いての説明を受けたことに対する記憶ではないかと予測できる。

「(折り)伏せ縫い」、「袋縫い」は、東京書籍の教科書⁽⁷⁾⁽¹²⁾1社のみが掲載している。「初めて聞いた」の割合がそれぞれ全体の89.1%、65.2%といずれも高い割合である。中学校全体における各社の

教科書採択率が3分の1と仮定して、「(折り) 伏せ縫い」, 「袋縫い」のように1社にのみ掲載されている場合には、3分の2が未習と判断することもできるが、「(折り) 伏せ縫い」, 「袋縫い」いずれの縫い方においても「中学校で習った」の割合が全体の2.2%であり、使用した教科書に依存していないと考えるほうが妥当と言えよう。

「入学前からできた」の内訳が「家族から習った」, 「独学」の割合が50%を超えるのは、「ブラケットステッチ」, 「折り伏せ縫い」, 「流しまつり」, 「バイアステープの裁ち方」, 「切りじつけ」の5つである。この結果から、これらの縫い方はご家族の中に洋裁または和裁をされる方がおられることや本人の興味・関心の高さ故に既知であることが予測できる。一方で、総体的にみると、家族から習った割合が、全ての縫い方で20%に満たないことから、親世代の針離れ、核家族の増加による祖父母からの伝承の低下が考えられる。

教科書上は大学入学前の既習の縫い方であっても実際には個人差が大きい。このような現状において、大学入学後に今一度、縫製技術の定着化を図ることが求められよう。本科目では、スカート、ワンピースに必要な縫い方を中心に基礎的な縫い方15種を基礎縫いの課題として提示している。

4-2 課題としての基礎縫い

基礎縫いは、基本的に授業内で実施するのではなく、課外に学生自身で行う課題の形式としている。

25×95cmサイズのシーチング（綿布、平織）を配布し、各種基礎縫いを施し、図3の状態に仕上げるといった内容である。扱う基礎縫いの中身としては、「並縫い」, 「ぐし縫い」, 「本返し縫い」, 「半返し縫い」, 「(置き) しつけ」, 「千鳥掛け」, 「端ミシン」, 「裁ち目がかり」, 「ロックミシン」, 「ブラケットステッチ」, 「袋縫い」, 「折り伏せ縫い」, 「流しまつり」, 「バイアス布による始末」, 「奥まつり」の計15種である。

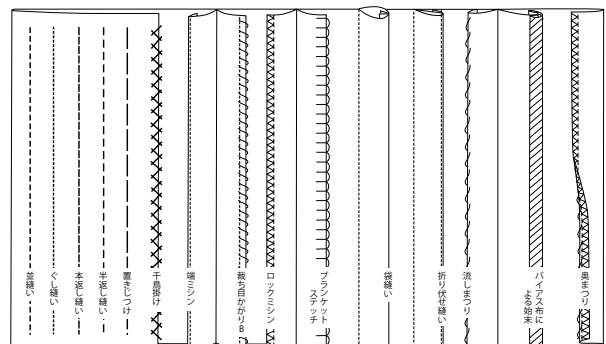


図3 「基礎縫い」完成図

補助教材としては、本科目の指定図書であるテキスト⁽¹⁷⁾, 及びデジタル教材⁽¹⁸⁾, 完成見本の3点である。図4は、本学で用いている基礎縫いデジタル教材⁽¹⁸⁾のINDEXである。それぞれのイラストをクリックすると、動画が閲覧できる形式である(図5)。デジタル教材は、平成25年度の受講生から利用を開始している⁽¹⁹⁾。

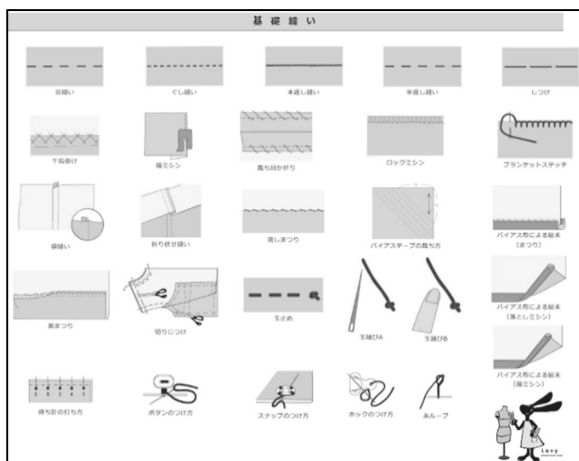


図4 デジタル教材画面 (INDEX) ⁽¹⁸⁾

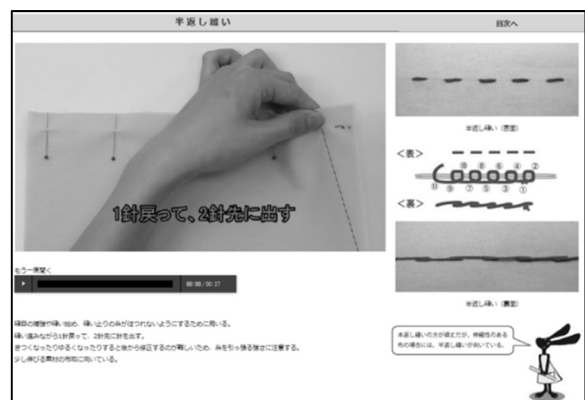


図5 デジタル教材画面「半返し縫い」 ⁽¹⁸⁾

基礎縫い課題は、3回に分けて実施し、その分類は表3に示す通りである。

Group1は手縫いの6種である。これは、スカートの仮縫いに先駆けて行うが、作品においてこれらの縫い方が反映される箇所は次の通りである。「並縫い」は、スカートのダーツ仮縫いに使用、「ぐし縫い」は本科目では使用しないが、後期の「アパレルコンストラクション実習Ⅱ」で製作するブラウスの袖山のいせ込みを施すために使用、「半返し縫い」は、そのものは本科目では使用しないが、スカートの裏布をファスナー周りに星止めする際に縫い方の原理を説明するために活用、「本返し縫い」、「千鳥掛け」は本科目では使用しないが、基礎的な縫い方の1つとして、「置きじつけ」は仮縫いの脇、後ろ中心、裾などの縫製及び、裏布（本縫い）の出来上がり線の縫製に使用する縫い方である。

Group2は裁ち端の始末を中心に集めている。これは、スカートの本縫いに先駆けて実施する。「端ミシン」、「ロックミシン」、「ブランケットステッチ」、「裁ち目かがり」は全て縫い代の始末をする方法計4種であり、図3は、中表に合わせた状態の裏面をイメージしている。本科目の作品に使用する縫い方は、「端ミシン」である。これは裁ち端の始末としてではないが、スカート裏布の裾に用いる縫い方である。Group2では、裁ち端の始末を4種学ぶことになるが、これらは布によって適する方法があることその他に道具などの実習環境によって選択することもできる。例えば、中学校にはロックミシンを設けていない可能性が予測でき、また、生徒の人数やカリキュラム次第ではミシンを使わず手縫いで裁ち端の始末をしたい場合もあろう。既製服から判断するとロックミシンさえマスターすれば裁ち端の始末は熟せるように思いがちであるが、上記のような理由から複数の方法を学ぶことに価値があると言える。裁ち端の始末の他にGroup2には「奥まつり」を含んでおり、スカート表布の裾に施す縫い方である。

Group3はスカートのベルト付けに先駆けて実施する。「まつり縫い」は、スカートのベルト付け及びファスナー周りの裏地の始末に用いる縫い方である。「袋縫い」、「折り伏せ縫い」、「バイアス布による始末（バイアス布の裁ち方を含む）」は本科目では使用しないが、基礎的な縫い方の1つとして扱っている。「折り伏せ縫い」はデニムなどの既製服に頻繁に用いられる縫い方であり、「バイアス布による始末」は衿付けや裾の処理のみならず、小物の裁ち端処理などにも頻繁に用いる縫い方であるため、ここに加えている。

表3 基礎縫いの分類

Group1	Group2	Group3
並縫い	端ミシン	袋縫い
ぐし縫い	ロックミシン	折り伏せ縫い
半返し縫い	ブランケットステッチ	バイアス布による始末
本返し縫い	裁ち目かがり	まつり縫い
(置き)じつけ	奥まつり	
千鳥掛け		

4-3 基礎縫いに関するレポート

基礎縫いの総括として、身の回りにある繊維製品の縫製観察レポートを行っている。縫製方法（図4の最下段を除く縫い方から選択）、アイテム名、布の種類（織物、編物、不織布のいずれか）を記載し、縫い目が見えるように写真撮影し、プリントアウトして貼り付ける。以上の情報について6つ選定することとするが、6つ全てが異なる6種の縫い方であることを条件としている。

図6.7は、平成28.29年度の「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」受講生が上記をレポートした際に選定したアイテムと縫い方をまとめたものであり、表4はレポートに記載された考察の一部抜粋である。アイテムの大半が服であるが、鞆やインテリア用品、小物なども選ばれており、身の回りをしっかりと観察したことが窺える。選択された縫い方に関しては、「端ミシン」と「ロックミシン」が圧倒的に多く、学生の考察にもこれらの縫い方が多かったとの記載がある。

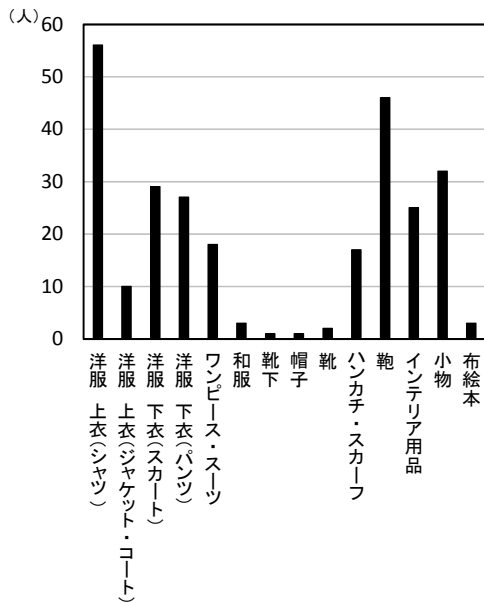


図6 縫製観察レポートに記されたアイテム

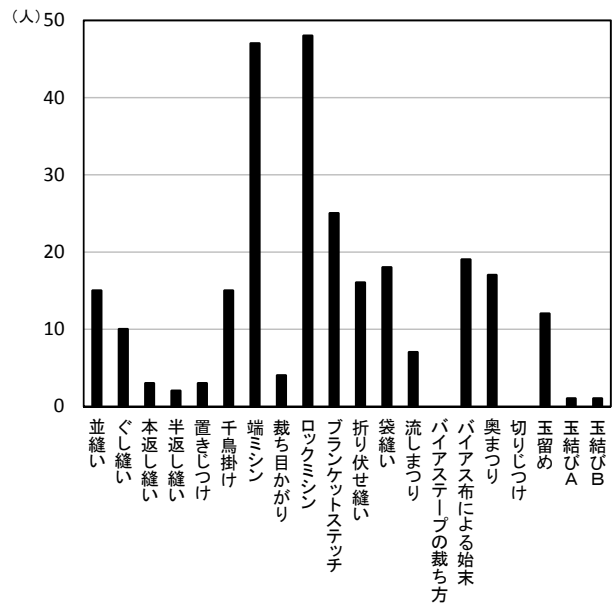


図7 縫製観察レポートに記された縫い方

表4 縫製観察レポートの考察 (一部抜粋)

縫製観察レポート 考察
ジャケットは、色んなミシンの縫い方があって千鳥掛けがあったのが驚きです。でも、ロックミシンが少なくズボンやパーカー等はロックミシンがいたる所にありました。
衣類には、端ミシンや奥まつりで裾を縫っているものがほとんどで、脇はロックで縫い合わせているものがほとんどだった。布のきれはしが見える箇所はなく、すべてほつれにくいように縫われていて、着脱をしたり運動しても簡単にはほつれたり破けたりしないように縫製されていると思った。
基本的にどんな服にも端ミシン、ロックミシンがかけられている。かばんなどの底の部分には、バイアス布による始末がされていることが多い。デニムの裏は、折り伏せ縫いが多くかけられていることが分かった。
基本的にどんな服や物を見ても端ミシンとロックミシンで縫製されていることが多く、その2つが基本的である。流しまつりなどは、浴衣やスーツの裾に縫製されていることが多かった。
身の回りの縫製を見ても、端ミシンやロックミシンが一番多く目についた。並縫いやぐし縫い等の手縫いを見つけることは出来ず、縫製としてやはりミシンが多く使われているという事が分かった。
端ミシンは多いなと思った。よく観察したら、自分たちでも出来る縫い方がたくさんあって、もしかしたら作るのが難しいと思っていたものも作れるのかなと思った。
端ミシンばかりだろうと思っていたのが、探してみると様々な縫製が見つかった。特にTシャツの襟元に折り伏せ縫いが使われているのが意外で、また奥まつりや袋縫いも意外にたくさん使われていた。
少し気を付けて服の縫い方などを見ているというんな縫い方があるんだなと思いました。後、布の種類によって縫い方、始末の仕方が変わるのかなと疑問を持ちました。これからたくさんの縫い方、布をみて勉強したいです。

入学時のアンケート調査 (図2参照) において、特に「ロックミシン」は「初めて聞いた」の割合が高いが、自分たちの身の回りを観察すると最も多く存在している縫い方であるということである。「千鳥掛け」、「折り伏せ縫い」、「バイアス布による始末」、「奥まつり」は入学前からできた割合が非常に低い (いずれも10%未満) が、縫製観察レポートでは20%弱の選定率である。このことから、それぞれの縫い方自体を見る機会がないということではなく、縫い方 (又は、縫い方の名称) に対する知識不足がこれらの低値の理由であると推察できる。身の回りの繊維製品の多くが既製品である現代において、仮に見る機会がないことに基礎縫いに関する知識 (図2参照) が依存するならば、手縫いである「並縫い」や「本返し縫い」、「半返し縫い」の方が実見する機会は少なく、やはり身の回りの縫製方法の有無ではなく、本人の知識面に依存すると言えよう。

表4に示す学生の考察には、既製服に「千鳥掛け」や「折り伏せ縫い」など様々な縫い方が施されていることへの感嘆、裁ち端処理が衣類において必ず行われていることや動作による布の破壊を抑えるような縫製がなされているなど様々な側面からの記述があった。普段は何気なく身に着けたり、使用した

りしている身の回りの繊維製品を観察するという新たな視点が得られたことは確かであり、このレポートを実施することで一定の学習効果があったことが示唆される。

5. 学習指導要領

5-1 新学習指導要領⁽¹⁾

平成29年に公示された学習指導要領⁽¹⁾（以下、「新学習指導要領」とする）では、学びの質を向上させる方策として「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとして掲げられた。

新学習指導要領⁽¹⁾において、中学校技術・家庭「家庭分野」の内容構成は、現行学習指導要領⁽¹⁾の4つの内容「A 家族・家庭と子どもの成長」、「B 食生活と自立」、「C 衣生活・住生活と自立」、「D 身近な消費生活と環境」を、「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」、「C 消費生活・環境」の3つに整理している⁽²⁰⁾。

中学校技術・家庭「家庭分野」の衣生活分野（「B 衣食住の生活」）では、「製作する物に適した材料や縫い方について理解し、用具を安全に取り扱い、製作が適切にできる」との内容が新設された。また、衣服などの再利用の方法についても触れている。また、ポイントとしては、和服について触れるとともに、資源や環境に配慮した製作の一環として、衣服などの再利用の方法も扱うこととされた。

和服に関しては、平成20年に公示された学習指導要領⁽¹⁾においても以下のような記載がある。国際社会で活躍する人材の育成を図るため、我が国や郷土の伝統や文化について理解を深め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが挙げられている。その中で中学校の家庭科では、地域の食材を生かした調理などを通じた地域の食文化や和服の基本的な着装などの学習を組み込むことが例として挙げられた。

5-2 アクティブ・ラーニングの実践に向けて

新学習指導要領⁽¹⁾が謳う「主体的・対話的で深い学び」について、秋田⁽²¹⁾は、家庭科は実技や実習があり、主体的であると思う先生が多いが、それが真の学びになるためには、課題、かかわり、理解の3要因の「深さ」を考えることが大事であると論じている。また、溝上⁽²²⁾は、主体的・対話的で深い学びはセットとして、アクティブ・ラーニングと関連づけて理解しないと、理解が間違えた方向に行くことを危惧している。なぜなら、「深い学び」は、アクティブ・ラーニングにおける学びの質を表現する言葉だからである⁽²³⁾。アクティブ・ラーニングは教科指導法（本学科では「家庭科指導法」）において、実践されることが多いが、竹嶋⁽²⁴⁾は、大学入学以前にアクティブ・ラーニングが未経験な学生にとっては外的な能動性に止まるアクティブ・ラーニングになることが多いと説いている。指導法のみならず、我々が担当する教科に関する科目においてもこれらを意識した上で授業カリキュラムを構築し、実践することが必要と言えよう。「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で扱うアイテムは、スカート、ワンピースであり、知識・技術の側面からデザインは一定としている。このような制約の中でいかにしてアクティブ・ラーニングを実現させるかは応用的な内容を扱う科目よりも困難かもしれないが、決して不可能ではない。「なぜ、ミシン目が汚いのか？どうやったらきれいな縫い目に調整できるのか？」、「なぜ、この布の場合には切りじつけが適するのか？」、「なぜ、地の目という概念があるのか？」など、このような些細なことに対して学生が疑問を持ち、自ら調べる、質問する、ディスカッションするというような姿勢を築くことができれば、作品そのものをデザインすることがなくてもアクティブ・ラーニングの実現が可能である。限られた時間の中で、知識及び技術を全て教授することは現実的に困難である。「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」と同時期に並行して開講している

「アパレルコンストラクション（講義科目）」（筆者らの内一名が担当）も同じく教科に関する科目として位置づけられているが、この科目と連動し、主に知識を講義で、技術を実習で習得するように学科としてカリキュラムを編成している。

能動的に考えることを引き出すためには、第一に物事に対して疑問をもつ姿勢が必要不可欠と言える。本科目を担当する筆者はこのような思考を導き出す策として、技術を指導する際にそれらの理由を説明するよう心がけている。「しつけ（縫い）をする際になぜ、しつけ糸が適するのか」、「なぜ、ファスナー周りの裏布を星止めするのか」など、作図や縫製全ての事象に必ず理由があることを印象付けるよう努めている。「アパレルコンストラクション（講義科目）」のレポートに以下のような記載（筆者下線）があった。

- ・「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」と連携していて、分かりやすいと思うことが多かった。
- ・他の授業で得た知識と重なったり、関連していることが分かったりするのが面白くて嬉しくもあった。
- ・今まで、スカートやワンピースに裏地がついていても特に何も思っていませんでしたが、この授業を受けて、どの服にも理由があつて（裏地が）ついていていると思い、衣服について考えるようになったし、考えることはすごく楽しいと思った。
- ・この科目で学んだ人体の計測方法やダーツなどが「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」の授業で出てきた時にリンクするから嬉しかった。
- ・「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で少しの説明しかされなかったダーツやゆりの意味など、この授業で知ることができたのでよかった。訳も分からず作っていたが、意味が分かると、その重要さが理解でき、とても勉強になった。

講義と実習とを連携していて、分かりやすかったこと、意味が分かると重要さが理解できるなど、並行開講していることが学生にとって理解度を向上させることにつながっているように感じられる。「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」と「アパレルコンストラクション（講義科目）」の中でそれぞれに学んだことを学生の頭の中で融合し、納得することや理解することで真の学び、また、新学習指導要領⁽¹⁾が謳う「主体的・対話的で深い学び」につなげていくことができると言えよう。

教員から投げかけた疑問でディスカッションが成立したとしても本来のアクティブ・ラーニングとは言えない。学生自らが疑問を抱くことが大切である。そのためには技術のみを伝えるに留まらず、それらの理由や理屈を教授していくことが必要であると考えます。

また、学生の認識面であるが、課題として扱ういわゆる作品と自分たちが日常で着用している衣服（既製服）とを切り離して考えている感が否めない。上述した「繊維製品の縫製観察レポート」を実施することで、自分たちが授業で学んだ縫い方と同じ方法で縫製されている既製服を見ることで作品と既製服との隔たりを無くすきっかけになっているように学生の考察（表4参照）から読み取ることができた。作品と自身の持ち物の間の隔たりが少なくなることは、多角的かつ横断的に理解することにつながるだろう。

5-3 新学習指導要領に向けて

和服に関しては、3.『アパレルコンストラクション実習Ⅰ』作品に含まれる技術」に前述したように縫製技術においては「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」で学ぶ内容で十分に網羅できている。

平成27年に行った調査⁽²⁵⁾では、平成20年に公示、平成24年度施行の現学習指導要領に基づいて授業を実践している教員に和服の着装を教授する際に用いている教材を問うたところ、全体の84.2%が教

科書、全体の45.4%が浴衣（実物）と回答している（いずれも複数回答可）。今後使用したい教材については、全体の55.7%が浴衣（実物）、全体の40.8%が教科書と回答した。また、これらを指導する上で重点を置いていることは、洋服との違い（全体の84.2%）、構成（全体の55.3%）、着付け（全体の40.1%）と続いた。現在扱っている教材、今後扱いたい教材いずれにおいても上位に教科書と浴衣（実物）が挙げられている。中学校で扱う和服は、製作を主とする被服製作の分野ではなく、我が国の伝統や文化を理解するというような服飾文化の分野を現・新学習指導要領共に主目的としている。このような観点から推察すると、大学においては被服構成学実習で取り上げる教材は和服に変更することは特に必要なく、これまで通りの洋服を教材として扱うことが妥当と言えるだろう。和服に関しては、講義（「アパレルコンストラクション」）の中で文化的な側面、平面構成の概念を中心に知識を得ることを目指せばいいのではないだろうか。

新学習指導要領^④には、製作する物に適した材料及び縫い方について触れられている。「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」の中では、製作に適した材料の観点からスカートには、ウール、綿（中厚～厚地）、ワンピースには綿（薄地～中厚）を推奨している。印付けの方法や裾の始末は布に適した方法を解説している。このことにより材料やアイテムにより様々な方法があることが理解できる。以下は学生のレポートに記載された考察の一部抜粋（筆者下線）である。

- ・小・中・高ではやったことのないことがいっぱい知識と技術面の幅が広がった。
- ・裾の始末は、ものによって奥まつりが好ましい場合もあれば、端ミシンがよい場合もあり、色々なやり方があることを知り、また一つ知識が増えた。
- ・自分の持っている服はどういう縫い方が使われているのかなとか、裾の始末はどうなっているのだろうなど、服についてどんどん興味が湧いてきた。
- ・布から（一から）ものを作ることも素晴らしいけれど、まつり縫いなど色々な基礎の縫い方を習ったので、家にあるものをリメイクするというように日々の生活にも生かしていけるのではないかなと感じ、魅力に思った。

知識、技術が広がったことに加えて、裾処理の方法が一つでないなど、布の組成や目的によって種々の方法があることの理解が得られたことが窺え、実習を通して興味が高まったことなど発展的な意見が上がっている。

また、新学習指導要領^④には、死蔵衣服や廃棄されそうなもののリフォームについて触れることが求められている。本稿に示す「アパレルコンストラクション実習Ⅰ」の中では直接的にはそれらに触れていないが、繊維製品の観察レポートをこなすことで、家庭に有する衣服の多くを観察する機会になったのではないだろうか。それらを活用し、リフォームへとつなげていくためには、授業の中で実物を見せるなど何らかの方法で触れることが必要なかもしれない。

学びを自身の力として生かすことを目指すには学んだ内容を授業内課題にのみに活用するのではなく、多角的に捉え、まずは日常化する中でそこから応用や発展に繋がると言えよう。本科目は被服構成学の実習を扱う授業カリキュラムであるため、構成や縫製が焦点であるが、更に組成や構造、管理面についても視野を広げて観察することを期待したい。

6. まとめ

体験不足、技術力の低下は学生や生徒を対象にして飛び交う言葉である。しかしながら、家庭科教育

の歴史から鑑みると、教師側にも波及していると考えられる。高等学校の家庭科教育が男女共修化されたのは平成6年度以降である。それ以前の女子のみ必須であったカリキュラムを履修したのは現40代以上であり、男女共修化されたカリキュラムを履修したのは現30代である。平成15年度施行の学習指導要領⁽¹⁾に被服製作の内容を含まない「家庭基礎」が新設されたが、このカリキュラムを履修したのは、現在の20代（一部30代前半）である。

家庭科の教材には、出来上がり線や裁断線が印字されたもの⁽⁸⁾や、難しい箇所を縫製した状態で販売している「半縫製済エプロン」⁽²⁶⁾というものが教材として販売されている。児童・生徒の実情に合わせた教材として捉えられがちであるが、一方で教える側の指導力に依存していることも一因かもしれない。昨今、教職課程の教科に関する科目として設置されている被服構成学実習において、小物を作品として扱うなど、技術の高くない内容を扱っている大学が増えている。これは、学生の既習内容に合わせてのことであると考えられるが、家庭科教師として生徒に関わるには、一定の知識・技術が必須である。学生の既習内容に合わせて、大学において学ぶ技術のレベルを低下させることは、次世代を担う子供たちに高等な教育を提供できないことにもつながりかねない。本学では、学びの質を保証し、一定の技術レベルを保ち、優秀な家庭科教員を輩出することに努める所存である。

注・引用文献

- (1) 文部科学省, <http://www.mext.go.jp/> (2017/7/13)
- (2) 野中美津枝他「高等学校家庭科の単位数をめぐる現状と課題 21都道府県の家庭科教員調査を通して」『日本家庭科教育学会誌』54(4), 2012, pp.226-236
- (3) 近藤れん子『近藤れん子の立体裁断と基礎知識』モードエモード社, 1979, p. 13
- (4) 末弘由佳理, 岡田由紀子「被服教育におけるドラフティング電子教材の開発」『武庫川女子大学情報教育センター紀要2012』2013, pp. 18-23
- (5) 末弘由佳理「デジタル教材を活用した被服教育」『大学教育と情報 JUCE Journal 2013年度』4, 2014, pp. 18-20
- (6) 中間美砂子他『技術・家庭 [家庭分野]』開隆堂, 2008
- (7) 佐藤文子, 渡辺彩子他『新しい技術・家庭 家庭分野』東京書籍, 2008
- (8) ぶんけい, <http://www.bunkei.co.jp/index.html>(2017/7/27)
- (9) 井上喜久子, 土屋郁子『スカートのデザイン112』文化出版局, 2005 (初版1988), pp. 96-97
- (10) 『レディスブック7月号』ブティック社, 2017, p. 136
- (11) 鶴田敦子他『技術・家庭 [家庭分野]』開隆堂, 2015
- (12) 佐藤文子他『新しい技術・家庭 家庭分野』東京書籍, 2015
- (13) 汐見稔幸他『技術・家庭 家庭分野』教育図書, 2015
- (14) 猪又美栄子他『ファッション造形基礎』実教出版, 2017
- (15) 内野紀子他『小学校わたしたちの家庭科5.6』開隆堂, 2014
- (16) 渡辺彩子他『新編新しい家庭』東京書籍, 2014
- (17) 文化服装学院編『改訂版・服飾造形の基礎』文化出版局, 2010 (初版2009)
- (18) デジタル教材, http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kankyo/laboratory/edu/d_kyozai/index.html (2017/7/18)
- (19) 末弘由佳理, 本田クミ, 大西かおり, 中尾時枝「被服教育における「基礎縫い」デジタル教材の開発」『生活環境学研究 武庫川女子大学』2, 2014, pp. 38-41
- (20) 学習指導要領・新旧対照表: 中学校技術・家庭 家庭分野 (開隆堂出版), http://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/katei/h28/h28_katei_shidoyoryo_taisho.pdf (2017/7/25)
- (21) 秋田喜代美「『深い学び』のための3要因」『KGKジャーナル』52(1), 2017, p. 10
- (22) 溝上慎一「アクティブ・ラーニングにおける深い学び」『KGKジャーナル』52(1), 2017, p. 11
- (23) 佐藤学「『深い学び』としてアクティブ・ラーニングが成立する条件」『KGKジャーナル』52(1), 2017, pp. 8-9
- (24) 竹嶋啓子「家庭科指導法 I におけるアクティブラーニングの実践報告」『学校教育センター年報 武庫川女子大学 学校教育センター』2, 2014, pp. 125-134
- (25) 清水佐知穂, 三好絢子「中学校と高等学校における新たな家庭科教材の提案」『生活環境学研究 武庫川女子大学』4, 2016, pp. 76-77
- (26) アイセック, <http://www.isec-web.com/>(2017/7/27)